

蝶の博物詩

生態34

産卵2



ツマキチョウ
(2012年4月30日 藤沢)

photo by

Nishiyama



ギフチョウの卵
(1998年4月23日 福島県)

蝶の博物詩

生態34

産卵2

今年の啓蟄は3月6日であった。啓蟄とは二十四節気の1つで、冬ごもりの虫が地中から這い出る頃である(大辞泉)。この時季に出てくる蝶には2つのグループがある。1つは成虫で越冬中に、たまたま暖かさにつられて飛び出すもので、わが家の近くではアカタテハ、ヒメアカタテハ、ルリタテハなどのタテハチョウをみる。気温が下がると再び姿を消し、みつけるのは不可能となる。もう1つのタイプは蛹(または幼虫)で越冬し、早春に羽化し、すぐに交尾、産卵し、短い命を終える。この類の蝶をspring ephemeral(春の儚(はかな)い命)と呼ぶ。

早春にもっとも多くみられる蝶は、モンシロチョウであろう。菜の花畑にモンシロチョウはかつて定番の組み合わせであったが、農薬で菜虫が滅亡した今は違う。それでも生き残ったモンシロチョウの寿命は10日ほどで、spring ephemeralと呼ばれてもよい。アゲハチョウの類も同様である。しかし、この場合のモンシロチョウは春型の蝶で、そのほか夏型、秋型など、年に数回の世代交代がある。これに対し、アゲハチョウの仲間でもギフチョウ、ヒメギフチョウなどは、長くとも数週間で種族全体がいなくなる。もう翌年のこの時期まで逢えないのだ。

20年前、会津若松市で開業している羽金重喜先生(たてうまクリニック)の母上に、ギフチョウの発生地を案内していただいたことがある。険しい山腹の杉林の中で、ギフチョウがカンアオイの葉の裏に産卵しているのをみた。薄緑色に輝く真珠のような卵塊である。そのあまりの美しさと同時に、70歳を越えていると思われるご老体で、私より早く崖を上がられるのに驚いた。

ギフチョウの産卵は最大でも226個といわれているので、非常に貴重である。戦前、多摩丘陵にたくさんいたギフチョウは土地開発によって絶滅し、現在は関東地方ではほとんどみられない。一方、モンシロチョウは250~750個、主としてアブラナ科の栽培種に産むので、農薬を使わない菜園で細々と生きているのであろう。

モンシロチョウによく似たツマキチョウは、その地域のサクラの開花期に合わせて飛び出してくる。モンシロチョウよりやや小さく、前翅の先端がかぎ状に尖っているのが特徴的で、雄はこの部分が美しい黄色調となる。卵はアブラナ科植物の花穂に産みつけられ、幼虫は蕾や花、蜜などを食べる。写真はハナダイコンの花穂に産卵している状態であるが、産卵数は約80個と少ない。私はツマキチョウが好きで、spring ephemeralの1つに挙げたい。

啓蟄候に出てくる虫は特定のものではない。かつて日本、中国では哺乳類、爬虫類、魚、鳥以外の小動物をすべて虫と呼んでおり、文字では虫偏を書くことが多かった。蛇がぞろぞろ出てくるのは気味が悪いが、昆虫はどんどん飛び出てきてほしい。

西山茂夫